

昭和六年四月十日 發行

發行所 吉田書店

研文館

この書は、兒玉日容上人の法弟であつた鈴木日雄上人 本山二七一世加歴
【慶応二年（一八六六）～昭和十四年（一九三九）】による小傳である。

兒玉日容上人小傳（未定稿）

法弟 鈴木 日雄録

上人俗姓は兒玉、幼名は重太郎と稱す、天保元年（月日不詳）京都に出生す、
兒玉家は素と長州毛利公の臣なりしが後、事故ありて京都に移住せるものなりと
云ふ上人其人と爲り剛直にして謹嚴幼時より學を好み身を佛門に投じて大に爲す
あらんとするの志を抱く。

兒玉家は當時京都本山寂光寺の檀越たり、同寺は日蓮宗日什門流（顯本法華宗）
に屬し京都日蓮宗十六本山の一に列し日淵上人の創立に係るものにして其歴代中
には日海、日達、日鑑上人の如き高德の師あり古書古畫を藏せる靈刹にして今尙

ほ別格本山として優待せらる安政の末年同寺の貫首に日政上人と云へるあり、日政上人は總本山妙満寺歴代に加はること前後二回に及び妙満寺引退後寂光寺に住し餘生を送りし老僧なり、此日政上人に就て其弟子となり剃髮染衣して名を存誓と改む時に上人歳三十歳なり。

上人は身を佛門に投じて以來親しく教界の實狀を觀るに行學の二道共に頽廢し僧侶は遊惰に流れ唯だ衣食を是れ事とするに過ぎず、殊に我日蓮門下の如きは何等新興の活氣なく氣息奄々只だ他宗に伍して其の現狀を支持するのみ上人之れを直視して晏如たるを得ず中年にして佛門に入りしは遅れたりと雖も今より精勵し將來大に教界に貢獻せんことを誓ふ、師範日政上人は徳行の優れたる老僧なりしも其學殖信仰に至つては首肯することを得ざるものあり、上人嘗て語りしこと

あり。

日政上人が朝夕勤行の時に自雲靈神痔疾平癒を祈願せるを聞き心竊かに以爲此師に就て日蓮教學を學ぶことの不可能なるを知れりと、師弟の道義は素より大切なりと雖も行學二道の爲めに一時師の膝下を離れて廣く天下の名師に就て其の指導を受くるは蓋し止むを得ざる事なりとし先づ小栗栖檀林に入り大に苦學を積まんとす。

小栗栖檀林は京都の郊外小栗栖村に在り、日蓮宗勝劣各派の檀林にして昔時此檀林の學窓に學びし僧侶の中には學殖の勝れたるもの相當に多く當時教界の學府として世間より尊敬を拂はれしことは人の普く知る所なり。

上人は此小栗栖檀林に學び螢雪を積むこと數年臺當二家の宗學に於て大に得る

處あり、當時日蓮門下に於ては凡て天台教學を重視し臺家の書を研究するに日も亦足らずと爲し日蓮教學の如きは只片々たる祖師の遺文を見て自ら蔑視し祖師が善巧方便的に愚夫愚婦に教へしもの、如く思へり、此謬見を矯めて本化別頭の教學を振起するは日蓮門下の本務なりとし今後此事に力を盡すを我々の任と爲し、是に於て自ら名を日容と改む、想ふに此業たるや容易の事に非ず最も實力を要する事は論を俟たず、然るに自己の力を省みるに未だ微力にして其の任に堪へざるの感あり博く學んで實力を養成するに非ずんば爲し得ざるものなるを以て是れより東都江戸に出で、一層苦學を積んとするの志を起す。

當時岡山に荻野正市なる人あり此人は素と永昌院日鑑上人の教化を受けて熱烈なる篤信家となりし人なり、荻野正市氏が上人の志に感じ自己の家計を傾けて

其學資を負擔することを申出でたり上人大力を得て愈々意を決して東都に出で學ぶこと、なる上人老後に及んでも常に荻野氏に對して深く感謝の意を漏らせしことあり、荻野氏の家庭にして事故ある時は假令身は他國に在るも直に行きて之れが慰問を怠らざりき、是れ上人が恩誼を忘れざるの致す所、復た以て其性格の一片を知るに足る。

文久年間上人は行旅を整へて東都江戸に出でんとす、當時江戸に出づるものは東海道を徒歩し多數の時日と勞力とを費して始めて到着することを得るものにして現今の人が恰も海外に洋行するが如き状態と同様の思ひをなしたるものにして東海道旅行は興味津津たるものあり、想ふに上人が此旬餘の旅行中到る處其山水の幽邃、朝暎夕陽の光景等を眺めし時、上人が胸中定めて詩情の鬱勃たるものあ